



Title	源氏物語系図研究序説 : 本文資料的価値を離れて
Author(s)	楠, なおみ
Citation	詞林. 2001, 30, p. 28-39
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67474">https://doi.org/10.18910/67474</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 源氏物語系図研究序説

— 本文資料的価値を離れて —

一

池田亀鑑氏の「源氏物語古系図の成立とその本文資料的価値について」(『日本学士院紀要』第九巻第一号 後「物語文学Ⅱ」『源氏物語大成』研究篇所収)が発表されたのは、昭和二十六年七月のことである。これ以前に「源氏物語系図」を取り上げた論文が皆無だったわけではないが、規模からも体系だった内容からも、これが本格的な「源氏物語系図」研究の嚆矢と言つてよい。しかし、それ以上にこの論文は、当時の「源氏物語」研究の動向に大きく関わるものであった。

この論文の発表された昭和二十六年、及びその前年の昭和二十五年は、戦前の阿部秋生・玉上琢弥両氏が提起した源氏物語成立論を受けて、武田宗俊・風巻景次郎氏等が新たに成立論を展開した年であり、これらが基本的に現行「源氏物語」内での整合性に立脚した立論であるのに対し、現行五十四帖の範囲を超えて「源氏物語」生成の動きを捉えようとするこ

の論は、成立論に新たな側面を加えた。

氏が世に問われたのは、「そのもの自体についての研究はまだほとんどなされていない」「源氏物語系図」伝本の博搜・分類・形態・性質等の紹介といった文献学的な成果と、巢守三位を中心とする、現行五十四帖に登場しない人物の事跡・巻名から想定される「より巨大な物語の大系」(『源氏物語大成』)の存在であったが、後者が「源氏物語」研究の趨勢に与えた衝撃の大きさのために、その後「源氏物語系図」は論文の題名どおり完全に本文資料になってしまったように思われる。

池田亀鑑氏の後、「源氏物語古系図」の研究を手がけたのが、成立論諸説の吟味・検討を行った「源氏物語の研究―成立に關する諸問題―」の著者、常磐井(長谷川)和子氏であるのは、上述の経緯から見て必然の趨勢であった。氏自身、「博士課程の研究テーマに拵んだのが前記の著書(前記「源氏物語の研究」)の補足発展としての源氏物語の成立論統篇でありました。本来はその中の一章として、成立論の資料である

楠  
なおみ

べき源氏物語古系図の研究が、そのまま研究目標となつてしまつたのがこゝにまともなものです。」(『源氏物語古系図の研究』笠間書院S48 あとがき)と述べられており、同書第四章は「巢守」「匂宮三帖」論に当てられている。

既に種々の観点から「すもり」は後代の偽作であろうとみなされているが、「源氏物語系図」は偽作「すもり」復元のための根本資料の一つとして、変わらぬ大きな「本文資料的価値」を有している。それだけに「源氏物語系図」研究は「(系図が)本来的に持っていた意味とは異なる意味において」(池田氏前掲論文)取り上げられることが多く、池田・常磐井両氏による伝本の分類・整理を除けば「そのもの自体についての研究」は未開拓の状態である。

しかし、池田亀鑑氏自身が述べているように、「源氏物語系図」は年立と共に「源氏物語」全体を組織的に把握しようとしたもので、そこには研究の萌芽を認めてよいと思われる。以下、「本文資料」としての系図ではなく、「源氏物語」組織化の試みとしての系図を探って行きたい。

## 二

「源氏物語系図」はいくつかの観点から分類することができ。たとえば「源氏物語古系図」という言葉はすっかり定着した感があるが、そもそもは池田亀鑑氏が、系図はその系

図当時の「源氏物語」の痕跡を留めるもの、という本文資料的価値に眼目を置いた視点から、三条西実隆らの長享二年奥書本以前の系図を便宜的に総称したものであり、この分類は何種類か考えられる分類の一つに過ぎない。この区分が「本文資料的価値」を度外視しても必要なのか、すなわち、実隆らによる系図刪定が「源氏物語」の組織化という点でそれ以前の系図と異なっているのかどうか現段階では断言はできない。実隆は文亀元年に宮中から「源氏物語系図」二巻を借り出しており、この系図について「美麗之古本」ではあるが「但例式不審事等多々也」と日記(八月四日)に書き残している。この系図がいかなるものであったのか、実隆が不審とした「例式」とは具体的にどのような点を指しているのか明らかではない。本稿で扱っている「源氏物語系図」は池田氏の論文中で「古系図」とされるものであるが、その点を不明にしたままこの言葉を使ってしまうと、どうしても実隆以前/以後の構図から逃れられない。本稿ではいったん「源氏物語系図」に呼び方を戻しておく。

さて「源氏物語系図」の分類だが、形態面からこれを分類することも可能である。系線で父と子を繋ぐ図形式のもの、文章形式のもの、巻単位で記すもの、概ねこの三種類に分かれる。この形式の違いは、同じく「源氏物語」の組織化を人物を通して行おうとしたものであっても、一括りにはできない本質的な違いをもたらしているように思われるのだが、今

は触れない。大部分の「源氏物語系図」は図形式で、厳密に言えばこの図形式「源氏物語系図」は各人物の経歴を述べた伝を記すものと、伝を記さず一枚に収める一枚系図とにさらに分けられる。前者を狭義の「源氏物語系図」とし、以降「源氏物語系図」はこの狭義のものを指す言葉として用いる。

「源氏物語系図」は本文中から系譜のたどれる人物を家系ごとに記した系譜部と系譜のたどれない人物を列挙した不入系図とを主な構成要素としている。系譜部は皇族と臣下に大きく二分されており、臣下の系譜は太政大臣家、大臣家、公卿、殿上人、受領と上位から下位へと配置されている。つまり、系譜部の配列は貴族社会のヒエラルキーを写しとっており、この順列の前後はそのまま家格の上下として明示されることになる。因みに一枚系図では、パズルのように余白の都合で家系の配置が決められており、このような価値観は見られない。

「源氏物語」はもちろんフィクションであるけれども、行動の正当性を史実に典拠を求めることで得ている現実社会の先例主義を背景に、フィクションであるはずの物語の何気ない事柄に至るまで史実の投影を見ようとする、准拠という研究方法が発達するのが中世という時代であった。そしてまたその中世において家父長制の進行とともに系譜意識は高まりを見せた。そこでは自らの存在の正当性は父祖に、その父祖との繋がりに求められる。系図が盛行するのは貴族社会のみ

ではない。軍記の中でひとかどの武将は「誰某の何代の孫」と名乗ることで自らのアイデンティティを表明している。

そのように考えると、「源氏物語系図」における家系の配列をあだやおろそかに考えるわけにはいかない。次節から一見奇異に見える記事を糸口にこの問題を考えていこうと思う。

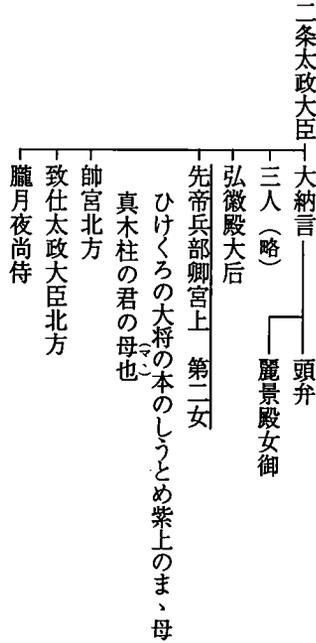
### 三

「源氏物語系図」には、時折現行「源氏物語」からは導き出せない記述が存在する。単純なミスによるものもあるが、中にはミスや無稽として切り捨てがたい記述もある。そうした記述の一例が次に示す、式部卿宮北の方、紫上の継母の出自に関する記述である。

【系図1】天理大学附属天理図書館蔵「源氏物語巨細」



【系図2】 神宮文庫本源氏物語系図（源氏物語古系図の研究）



\*式部卿宮北の方（先帝兵部卿宮上）以外は伝略 また紙面の都合で形を少々改めた。

これを見ると、式部卿宮北の方は、桐壺巻に右大臣として登場する二条太政大臣の娘、弘徽殿太后の妹とされている。現行「源氏物語」によると、式部卿宮北の方は、若紫巻に「もとの北の方やむごとくなくなどして」とあるのがその出自に触れる唯一の記事で、「源氏物語大成」・「源氏物語別本集成」によれば、系図の記述を支えるような異文はない。式部卿宮北の方は他に賢木・須磨・乙女・真木柱 若菜上下の巻々に登場するが、そのいずれにも該当する異文は見られない。むしろ現存本に見出せないからと言って、そういう記述を有した本文が過去に絶対になかったとは言えないが、失われた本文

をこの記述から幻想するよりも、「源氏物語系図」がなんらかの意図を以ってこのような解釈を施したと考える方が建設的ではないか。

式部卿宮北の方が二条太政大臣の娘であると明記された「源氏物語」本文がなかったにも関わらず、解釈の結果この二者を結合させたと仮定して、その理由を能うかぎり現行「源氏物語」から探り出しておこう。

まずは二条太政大臣の娘（達）を整理しておこう。花宴巻に初登場し、朱雀院の尚侍となつたいわゆる隴月夜尚侍が二条太政大臣の六君であるので、二条太政大臣には娘が少なくとも六人はいることになる。花宴巻で光源氏が隴月夜尚侍に逢つた後、その素性について考えをめぐらせる過程にかなりまとまって二条太政大臣の娘の消息が知られる。

おかしかりつる人のさまかな、女御の御おとうとたちにこそあらめ。まだ世になれぬは、五、六の君ならむかし。帥の宮の北の方、頭中将のすさめぬ四の君などこそよしと聞きしか、なかなかそれならましかば今すこしをかしからまし。

〔大成〕二七三②④、適宜私に表記を改めた。以下同じ）  
 花宴巻の時点で独身なのが五君・六君、致仕太政大臣（頭中将）の北の方が四君、帥宮の北の方が順序からして三君、他にももちろん弘徽殿太后がいる。弘徽殿太后が二条太政大臣の長女であるのか次女であるのかは不明だが、いずれにしても

二条太政大臣には一人、存在はたしかながら全く消息の知れない娘がいる。彼なら年格好も式部卿宮北の方の父として不足はない。「やむごとくなくなどして」とも矛盾しない。そして以上の条件を同様に満たす人物は第一部中には他に見出せない。式部卿宮北の方を二条太政大臣の娘とする外面的な条件は揃っている。

しかし、いくら条件的にふさわしくとも、それだけで一人の人間をある家系に組み入れる理由として充分であろうか。系図とは「系」の図であつてみれば、「血」が系を成していることが本文から読み取れない以上それに代わるなにか、式部卿宮北の方が二条太政大臣家の人間であることを納得させる要素がなければならぬだろう。

若紫巻に、紫上の母は式部卿宮北の方の勢力に圧されて、物思ひから死に至つたとある。これは帚木巻・夕顔巻に語られる、夕顔とその娘玉鬘へ迫害を加えた致仕太政大臣の北の方、二条太政大臣の四君を、さらに四君以上に弘徽殿太后を想起させる。

桐壺の更衣を亡くした太上天皇（桐壺院）が、更衣に似ていると聞いて藤壺宮に入内を申し入れた時、母后が「あな恐ろしや、春宮の女御のいとさがなくて、桐壺の更衣の、あらにはかなくもてなされにし例もゆゆしう」思つたとあるように、弘徽殿太后は桐壺の更衣を「めざましきものにおとしめ嫉みたまふ」た「御かたがた」の筆頭であつた。

また、夫が愛情を分ける女への嫉妬から、その女の子どもを敵視する点でも弘徽殿太后と式部卿宮北の方は似てゐる。

冷泉院のもとへ入内させた王女御を源氏が後援しないことや、髭黒大将の妻であつた娘が源氏の養女格の玉鬘のためにその座を追われたことなどから、式部卿宮北の方は紫上のみならず、源氏にまでも敵意を抱き続けたことが随所に語られているが、そのような北の方のことを「源氏物語」では繰り返して「さがな者」と呼んでいる。

母北の方泣きさはぎ給て、「おほきおとゞをめでたきよすがと思きこえ給へれど、いかばかりのむかしの仇敵にかおはしけむとこそ思ほゆれ。（中略）」と言ひつゞけの、しり給へば、宮は（中略）との給に、いよいよ腹立ちて、まがまがしきことなどを言ひ散らし給。この大北の方ぞさがな者なりける。（真木柱九五二⑩〜九五三⑪）（蜜宮が真木柱になじめないのを）大北の方といふさがな者ぞ、常にゆるしなく怨じきこえ給。「親王たちは、のどかに二心なくて見給はむをだにこそ、はなやかならぬ慰めには思ふべけれ」とむつかり給

（若菜下二二三⑦〜⑨）

そしてこの「さがな」性質は、二条太政大臣・弘徽殿太后のものでもある。

祖父大臣、いときふにさがなくおはして、その御ままに

なりなん世をいかならむと上達部・殿上人みな思ひなげく。  
〔賢木 三四三④⑤⑥〕

〔弘徽殿太后は〕老いもおはするままに、さがなさもまさりて、〔朱雀〕院もくらべ苦しう、たとへがたくぞ思ひきこえたまひける。

〔乙女 七〇六④⑤七〇七①〕  
二条太政大臣・弘徽殿太后・式部卿官北の方以外で「さがなし」の語が用いられるのは、草子地の例の「ものいひさがなさ」を除くと、雨夜の品定め、指食いの女や幼時の匂宮のわんぱくぶりなどにであり、一時的なものではない人物の性質としての用法はこの三人に限られる。式部卿官北の方が源氏のことを長く憎み続けるのは、実家にとつても式部卿官家にとつても政敵であり、私怨もあるということになり、けだし式部卿官北の方の出自として絶妙の解釈である。

#### 四

式部卿官北の方を弘徽殿太后の妹、二条太政大臣の娘とするのは、今のところ上述の「源氏物語巨細」「神宮文庫本」と神宮文庫本とごく近い関係にある「宮内庁書陵部蔵源氏物語系図」〔函号210 727〕のみである。この三本は他の多くの「源氏物語系図」に類例を見ない重大な特徴をも共有し、伝流上の近さがうかがえるが、文献学的に特異な三本にのみ見られる行き過ぎた解釈と処理してしまふのは、表面的だと

思われる。

二条太政大臣家が「源氏物語系図」の中でどのように位置付けられているか見てみたい。

「源氏物語」の中で「さがな者」とされる式部卿官北の方を、同じく「さがな」者親娘である二条太政大臣・弘徽殿太后に結びつけた「源氏物語巨細」「神宮文庫本」は二条太政大臣家をどのように見ているのであろうか。

朱雀院の御おほち、もとは右大臣、さか木の巻に太政大臣、明石にうせ給き。／＼きふにのとめたる所なき御心なりかし。あし大臣とも。

〔源氏物語巨細〕二條太政大臣伝、句読点のみ付した。〔〕は原本改行)

朱雀院の母方の御祖父、もとは右大臣、賢木の巻に太政大臣にありがた給ふ。明石にうせ給き。あし大臣とも申。

〔神宮文庫本〕二条太政大臣伝、適宜私に表記を改めた。

朱雀院の御母、葵の巻に后に立ち、若菜にうせ給へるよし見ゆ。あし後の宮とも申。

〔同〕弘徽殿太后伝、適宜私に表記を改めた。

姫君達の琴を称賛し所望する薫に対して「いで、あなさがなや」と八宮が応えているように、ニュアンスに幅のある「さがなし」の語を避けてか、両本は二条太政大臣家の中心的な人物を「悪し」という端的な言葉で評している。しかも、「あし大臣」「あし後の宮」と、呼称として成立させている。

そしてこの呼称は「源氏物語系図」諸本間にある程度の広がりを持って受け入れられている。

朱雀院の御祖父、もとは右大臣、賢木の巻に太政大臣に  
あがり給。明石にうせ給。急にのどめたる所なき御心也。  
あし大臣とも。

(為氏本源氏物語系図(「源氏物語大成」資料篇)二条太政大臣伝)

朱雀院の御祖父、もとは右大臣、賢木の巻に太政大臣、  
明石にうせ給。急にのどめたる所なき御心なりかし。あ  
し大臣とも。

(伝越部禪尼筆源氏物語系図(「東海大学蔵桃園文庫影印兼書」)二条太政大臣伝)

為氏本では小字であったものが、伝越部禪尼筆本では本文  
になっている。

朱雀院の御母、葵に后にる給ふ。あく后と申。

(安養尼本源氏物語系図(古代文学論叢3「源氏物語と枕草子・研究と資料」)弘徽殿太后伝)

「源氏物語」には「あし大臣」「あし後の宮」(あるいは「あく后」と呼ばれた事実は見えない。源氏の敵対勢力であることが強調された結果なのであろうし、またそれこそが式部卿宮北の方を呼び入れることにもなった二条太政大臣家の在り方なのである。

そもそも系譜部の論理から見て、二条太政大臣家への評価

は「源氏物語系図」系譜部におけるこの家系の配置から読み取るべきなのかもしれない。

上述したように、「源氏物語系図」の系譜部は皇族と臣下に大きく二分され、臣下の系譜は太政大臣家、大臣家、公卿、殿上人、受領と上位から下位へと配置されている。それぞれの階級内での順序は諸本不同でその基準は必ずしも明確ではないが、管見に入った系図では全て二条太政大臣家は撰政太政大臣家の次に位置している。

撰政太政大臣・二条太政大臣はそれぞれ桐壺巻登場時左大臣・右大臣と、撰政太政大臣の方が上席だが、子女の年齢から推して二条太政大臣の方がかなり年長であらうし、また太政大臣の就任も二条太政大臣の方が先である。臣下の筆頭の家系に二条太政大臣家を据えることはそれほど不当な処置とも思われないが、実際にはそうした本は目にしない。この配置に「あし大臣」の家系への評価を読み取ることは不可能だろうか。

とはいえ、式部卿宮北の方の出自に関する「源氏物語巨細」「神宮文庫本」「書陵部蔵本」の記述を、臣下筆頭の家系の決定という「源氏物語系図」全体の構成と関わらせようとするのは、このままでは文字通りうがち過ぎであらう。なぜなら「撰政」太政大臣家であることが、二条「太政大臣」家を抑えて臣下筆頭の家系に据えられている決定的な要因だからである。

しかし、そもそも二人は真に「摂政」太政大臣と二条「太政大臣」なのであろうか。このことを、「源氏物語」「源氏物語系図」の人名呼称、両方の問題として、節を改めて考察していく。

## 五

【源氏物語古系図の研究】第二章の「古系図諸本人名呼称一覧表」によると、摂政太政大臣・二条太政大臣の呼称は諸本同一で異同は全くない。これは「源氏物語系図」内で二人の極官が「摂政太政大臣」「太政大臣」と、前者が一段格上であり、したがって摂政太政大臣家と二条太政大臣家の家格もまた、前者の方が一段格上なのだ、とする共通認識があることを示している。問題は、それを自明とするには「源氏物語」本文はかなり微妙だ、ということである。

「源氏物語系図」は、男性の場合、伝部に官位の昇進を記すので、現存最古本とされる「九条家本源氏物語系図」（『東海大学蔵桃園文庫影印叢書』、表記は適宜私に改める）から二人の伝を挙げておく。

### 摂政太政大臣

桐壺の巻に左大臣にて源氏の加冠せし人也。

薄標の巻に太政大臣にて摂政し給。歳六十三。

もとは致仕の人也。薄雲の正月にうせ給。源氏

舅。夕霧の大将の祖父。

### 二条太政大臣

朱雀院の母方の御祖父。右大臣ときこえき。

榊に太政大臣にさがり給。明石にうせ給。

摂政太政大臣の伝中、傍線を付した箇所「太政大臣にて摂政し給」は、薄標巻の次の部分を根拠としている。

同じ月の廿余日、御国譲りのこと、(中略)源氏の大納言、内大臣になりたまひぬ。数定まりてくつろぐ所もなかりければ、加はりたまふなりけり。やがて世のまつりごとをしたまふべきなれど、「さやうのことしげき職にはたえずなむ」とて、致仕の大臣、摂政したまふべきよし、ゆづりきこえたまふ。「病によりて位を返したてまつりてしを、いよいよ老のつもり添ひて、さかしきこと侍らじ」とうけひき申したまはず。(中略)病に沈みて返し申したまひける位を世の中かはりてまた改めたまはむに、さらに咎あるまじう、公私定めらる。さる例もありければ、すまひ果てたまはで、太政大臣になりたまふ。御歳も六十三にぞなりたまふ。

(薄標 四八五④〜四八六③)

朱雀院が退位して新帝冷泉治世が始まったが、左右大臣とも席がうまっていたので源氏は令外の官である内大臣になった。同時に「世のまつりごと」をするべきだったのだが、「さやうのことしげき職」は自分には荷が重いとて、賢木巻に致仕していた元左大臣にその役職を譲ったという文脈

であり、系図はここから致仕の大臣が摂政になったことを読み取っているのである。しかし、ここで性急に致仕の大臣の摂政就任を決定させずに物語に付き合うなら、源氏から譲られた摂政職を辞退するものの、太政大臣に就任するのが物語の最終的な決定であったと分かる。この時摂政も合せて引き受けたのか否かは不明であり、致仕の大臣の摂政就任を「源氏物語」本文から確実に導き出すことはできない。のみならず、あくまで「摂政」という言葉の有無にこだわるなら、「源氏物語」中「摂政」の用例は先の引用のものが唯一であるため、他の誰かが摂政になったかどうかとも明らかにし得ない。

しかし、ここでもう一度先の文脈をたどると、「世のまつりごと」をするべき源氏がその職を辞し、致仕の大臣に摂政職を譲ったのだから、「世のまつりごと」をするとは「摂政になる」ことを意味し得る言葉と考えられる。そして、「世のまつりごと」をする人物は「源氏物語」中に何人か見られる。

A 春宮（冷泉院）にこそはゆづりきこえたまはめ。おほやけの御後見をし、世をまつりごとつべき人をおほしめぐらすに、この源氏の、かく沈みたまふこと、いとあたらしうあるまじきことなれば、（明石四六八⑤）⑦  
B（摂政太政大臣の死後）ただ今世をまつりごちたまふ大臣（源氏）

C 大臣（源氏）太政大臣にあがりたまひて、大将（致仕太政大臣）内大臣になりたまひぬ。世の中のことどもま

つりごちたまふべく、ゆづりきこえたまふ。

（乙女六七五⑩⑪）

D（冷泉院退位、今上即位）左大将（鬚黒）、右大臣になりたまひてぞ、世の中のまつりごとつかうまつりたまひける。

（若菜下一一三三⑨⑩）

Aは濔標巻の状況を想定したもので、「世をまつりごと」は「世のまつりごと」をするのと同義であるが、それ以上に確認しておかねばならないのは濔標巻とDとの状況の相似である。すなわち、御世代りにもなって執政者が代わっているものであり、これは「源氏物語」当時の政治形態から言って当然のことである。であつてみれば、太上天皇から朱雀院へ御世が代つて、朱雀院の外祖父たる二条太政大臣が「世のまつりごと」をしたと考えるのが妥当であろう。

事実、賢木巻には二条太政大臣が政治の実権を握り、源氏や左大臣の前勢力を圧迫し、朱雀院自身思うに任せぬほどの権勢を張ったことが随所に語られている。その執政を指して、物語は「（二条太政大臣の）御ままになりなん世」と表現しているが、それは濔標巻において「世の中のこと、ただなかにわけて、太政大臣、この大臣（内大臣＝源氏）の御ままなり」とあるのと、評価こそ正反對だが、全く同じである。二条太政大臣は朱雀院治世下において「世をまつりごち」たに違いない。それは桐壺巻に「春宮の御祖父にて、つゝに世の中をしりたまふべき右の大臣」とあることによって保証さ

れるだろう。

以上見てきたように、摂政太政大臣と二条太政大臣との格差は自明のものではない。本文の解釈次第では、摂政太政大臣は二条太政大臣同様ただの太政大臣かもしれないし、逆に少なくとも、摂政太政大臣・二条太政大臣・源氏・致仕太政大臣・嵯黒右大臣の五人が摂政であつたかもしれないのである。そうであつてみれば「摂政」太政大臣家と二条「太政大臣」家との格差は、両家の間に格差を望む感覚によつて恣意的に付けられたものと考えられるもあながち「うがち過ぎ」とも言えないのではないか。

それでもまだ「源氏物語系図」が人名呼称においてみだりに解釈を加えず、物語本文に「摂政」とある、という事実をなによりも重視したのではないかと、この疑いも残るかもしれない。しかし、その疑いは次に示す人名呼称の実例によつて解消されるはずである。

知られるように、明石君は「源氏物語」本文で一度も「明石上」とは呼ばれない。「明石の御方」をいわば上限として、「明石のおもと」（常夏巻）という女房扱ひした呼ばれ方すらされている。そしてそれは、明石の中宮の実母ではあつても、先の播磨守の娘という身の程にふさわしい範囲での伸縮であつたはずである。しかし、先ほどと同様「古系図諸本人名呼称一覧表」を見ると、明石君の呼称は「明石上」で諸本統一されている。初期の注釈書「紫明抄」の題が示すように、

明石君は紫上とならぶ存在と考えられており、「無名草子」などの物語の鑑賞批評をした書にも好感を持つて書かれていゝる。明石君はそれでも六条院の一面を占める源氏の妻妾の一人だが、夕顔にいたつては、致仕太政大臣とも源氏とも若い時の恋人であるに過ぎないにもかかわらず、諸本一致で「夕顔上」との呼称を用いている。夕顔か浮舟のような身の上にあこがれた「更級日記」の著者を早い例として、「源氏物語」以後は夕顔のような頼りない女性が好まれたが、そういった嗜好をこの呼称は如実に反映していゝよう。一方、紫上には及ばないものの、姉が太上天皇の女御と大臣の娘かと思われ花散里は、まれに「東の上」（夕霧巻等）と本文中に「上」で待遇されることがあるにもかかわらず、「源氏物語系図」では「花散里上」の場合と「花散里」のみの場合と諸本間に揺れがある。他の人物の伝中に登場する時には大体が「花散里」のみである。いささか地味な彼女の在り方を表していゝようか。

このように、「源氏物語系図」はけつして本文に忠実な人名呼称を行っているわけではない。むしろ、多分に嗜好に傾斜した呼称を採択していると言つてよい。

朱雀院治世下、自家の勢力を嵩にきて「白虹日を貫けり。太子をちたり」と源氏にあてこすりを言う頭弁、源氏に長く敵愾心を持つて源氏の政界追放を謀り、須磨退去を導いた弘徽殿大后を擁して、二条太政大臣を始祖とする一家は、源氏

の敵対勢力として決して好印象は持たれない一族である。一方で摂政太政大臣は、一人娘葵上を朱雀院後宮に入れず源氏を婿取りしたために、二条太政大臣執政下では源氏とともに政治的圧迫に耐え、冷泉院が即位するや源氏とともにその治世を支えている。いわば運命共同体のような相を、滯漂巻までは呈している。

致仕の大臣に「摂政」という言葉が明示されているのをいいことに、文脈を無視して彼を「摂政」「太政大臣」とし、「あし大臣」には二条「太政大臣」家として臣下筆頭の家系を許さず、両家の間に格差をもうけることは充分考えられるであろう。そして「源氏物語系図」系譜部は摂政であったか否かの違いを大きく見る身分秩序に貫かれているのである。

潜在していた摂政太政大臣の二条太政大臣への優位の感情を、身分秩序によって理由付け説明付けしているのであり、「源氏物語系図」の配列はそのことを明確に視覚化しているのである。

## 六

式部卿宮北の方を二条太政大臣の娘とすること、それ自体に限って言えば、「源氏物語巨細」「神宮文庫本」「書陵部蔵本」にのみ見られる特殊な解釈ではあろう。しかし、「さがな者」の彼女を一族に呼び入れた二条太政大臣家は「あし大臣」

を始祖とする一族であり、「源氏物語」中初めての摂政であった可能性もありながらそれを許されない家系であった。

記述の表層のみを取上げるのではなく、記述を支えるものを、「源氏物語」を系図というフォーマットで組織化せんとする試みの中に認めようとする時、それはたんに特殊であることをやめる。水面の上に見える氷山の一角がその下の巨大な氷山の存在を知らせてくれるように、表面に見える「特殊」が「源氏物語系図」全体と深い所でつながっている、そういった可能性を見出したように思う。

「源氏物語系図」は本文資料とはまた別の、豊かな泉を私達に提供してくれるであろう。

## 注

- (1) ほかにも「源氏物語系図」関係の論文は少なくはないが、「源氏物語系図」を「資料として」用いているという点では同じである。
- (2) 系図資料が中世を待って初めて登場したわけではもちろんない。母系制社会から家父長制への移行により系譜意識が実体化に向かっているということである。ところで系図は古代の口頭での語り伝えから文章系図、始祖から後孫へ系線を縦方向に結んでいく縦系図、縦の系線で父子関係、横の系線で兄弟関係を示し、系線を横へと継いでいく横系図へと移行していくが、狭義の「源氏物語系図」はこの横系図である。このことは「源氏物語系図」がまぎれもなく現実社会の空気の中から生まれたことを物語っている。

(3) 花宴巻に二条太政大臣の娘達について触れている箇所があるが、諸本「帥の宮の北の方」とあるところにもし「兵部卿宮」(花宴巻の時点では式部卿宮は兵部卿宮)とする伝本があったなら、問題は別である。兵部卿宮と帥宮は賢木巻の不遇の源氏を訪問する人物として諸本間に混同があるし、花宴巻の帥宮を源氏の弟、蛭兵部卿宮と解するのが通常だが、源氏の同年の弟と見ても致仕太政大臣より五歳以上年少であり、年長の致仕太政大臣の北の方が四君で、蛭宮の北の方が三君というのも少々落ち着かないので蓋然性はある。しかし、今のところそのような伝本の存在は知られていないし、なにより「源氏物語巨細」「神宮文庫本」ともに「帥宮北方」を「式部卿宮北の方」とは別に挙げているので、やはり独自の解釈の結果なのであろう。

(4) 敵視とまでは言えないが、実子に比べて継子の方が幸福なのを妬むという点では式部卿宮北の方と四君は共通する。式部卿宮北の方は源氏と結婚した紫上の幸運に心穏やかではないし(むかひ腹の限りなくとおぼすははかばかしくもえあらぬに、ねたげなること多くて、継母の北の方は、やすからずおぼすべし。賢木巻)、四君は入内したものの結局立后でできなかった娘の弘徽殿女御に比して、夕霧と結婚した雲居雁の水も漏らさぬ夫婦仲をおもしろからず思っている(女御の御ありさまなどよりも、はなやかにめでたくあらまほしければ、北の方、さぶらふ人々などは、心よからず思ひ言ふ藤裏葉巻)。そう考えると、「源氏物語巨細」が四君にわざわざ「三条の上のま、母」と雲居雁の継母であると注記するのは意味深長である。

(5) 「神宮文庫本」は末摘花の父常陸宮を太上天皇(桐壺院)の弟とし、それを口伝と称するなど他の諸本に見られない特異な記述を

有することで知られるが、「書陵部蔵本」はそうした「神宮文庫本」のみに見られる記述を有し、組織・段組みなども一致することから「神宮文庫本」の類本と認められる。

(6) このことは稿を改めて別の機会に論じるつもりである。

(7) 花散里は父親が本文中で明記されていないため、系譜部ではなく不入系図への記載になる。不入系図は系譜部は同列に扱え得ない部分もあるかと思うが、呼称に関しては同様に考えられると思う。

付記 成稿にあたり、資料の閲覧を御快諾下された天理大学附属天理図書館・宮内庁書陵部に深謝申し上げます。

(くすのき・なおみ 本学大学院博士後期課程)